

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03295

研究課題名（和文）学級集団の階層性がいじめ傍観者行動に及ぼす影響

研究課題名（英文）Effects of class hierarchy on bullying-bystander behavior

研究代表者

有倉 巴幸（Yukura, Miyuki）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・教授

研究者番号：90281550

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中学生を対象として、いじめを傍観するメカニズムとしての多元的無知に着目し、傍観行動が学級集団構造によって規定されるかどうかを明らかにすることを目的とした。第1研究では、学級内地位認知の測定方法としてSICS-P法を開発し、その妥当性及び信頼性の検討を行った。第2研究では、いじめを傍観すべきかどうかについて自身の態度と周囲の生徒の態度推定にズレがある生徒は、そうでない生徒よりも周囲の傍観に同調していた。加えて、両者の関係がSICS-P法で測定される学級集団構造によって異なっていた。第3研究では、パネル調査を実施し、学級の生徒への信頼感が、自他の傍観態度の評価に影響することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、学級内地位認知を測定するSICS-P法を開発したことで、学級集団構造を簡便に測定することができる。併せて、いじめ傍観行動における自他の態度のズレが、周囲の傍観行動への同調を促進することが明らかとなったことで、いじめ傍観行動が多元的無知によって説明可能であること、学級集団構造によってその関係性が異なる可能性があることが示唆された。今後、SICS-P法を活用することで、学級内でいじめが起こったときに、いじめの傍観が促進されるかどうかを予測でき、いじめ傍観行動への適切な介入が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study focused on pluralistic ignorance as a mechanism for bystander bullying among junior high school students, and aimed to clarify whether bystander behavior is specified by the class group structure. In the first study, the SICS-P method was developed as a method to measure the perception of status in the classroom, and its validity and reliability were examined. In the second study, students who had a discrepancy between their own attitude and that of surrounding students regarding whether or not they should stand by and watch bullying more conformed to the surrounding students than those who did not. In addition, the relationship between the two differed by classroom group structure as measured by the SICS-P method. In the third study, a panel survey was conducted, suggesting that trust in the students in the classroom affects a discrepancy between their own and others' bystander attitudes.

研究分野：社会心理学

キーワード：学級内地位認知 学級集団の階層性 いじめ傍観行動 いじめ抑止態度 多元的無知 傍観行動への同調 評価懸念

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

学校で起こるいじめは、社会問題にもなっているように解決すべき喫緊の課題である。このいじめについて、本邦ではこれまで、加害者と被害者だけの問題ではなく、はやし立てる「観衆」や見て見ぬ振りをする「傍観者」も含めた学級集団の問題として研究されてきた(e.g., 倉永他, 2008; 森田・清永, 1986)。海外においても、例えば Salmivalli et al. (1996) は、いじめに関与する者をそれぞれ加害者 (bully)、加害者の助手 (assistant)、強化者 (reinforcer)、傍観者 (outsider)、擁護者 (defender)、いじめ被害者 (victim) に分けており、傍観者の割合が最も多かったこと (23.7%) を明らかにした。Salmivalli はその後、フィンランドのいじめ防止のための国家的プログラム (KiVa プログラム) の開発に関わっているが、このプログラムでは傍観者が被害者を支援する際に予想される被害を避ける具体的な方略も含まれている。このように、いじめ問題への解決の手段としては、傍観者がどうすれば抑止行動を採れるようになるかについて検討がなされ、KiVa プログラムについても一定の成果が上がっていると言える。しかし、なぜ、いじめを傍観するのか、どうすれば傍観者をいじめ抑止に向かわせることができるのかについては十分な検討がなされているとは言い難い。

この点に関して社会心理学においては、一般的な傍観行動は、責任分散、聴衆抑制、多元的無知といったことが原因となって引き起こされることが知られている (e.g., Latané & Darley, 1970; 杉崎・竹村訳 1977)。これらの知見を踏まえれば、いじめにおける傍観行動も、責任分散などの原因によって引き起こされていることが想定されるが、実証的な研究は十分でない。一般的な傍観行動において、ターゲットとなる出来事を目撃しているのは、互いに未知の他人であることが多いが、学級においては、1年間ほぼ同一のメンバーで構成される。従って、こうした関係流動性の低い集団に一般的な傍観行動の知見は適用しにくい。加えて、日本のいじめの多くが学級集団内で起こることを考えると、学級集団におけるいじめ傍観行動のメカニズムを明らかにすることは、いじめの早期発見、介入に有益な知見を提供するものと考えられる。

## 2. 研究の目的

【研究開始当初の背景】を踏まえて、本研究では以下の3点について実証的研究を行って検討した。

(1) まず、学級集団における個人の地位を測定するツールを開発した。先行研究では、学級内にスクールカーストに代表されるような地位が存在し、学級内の注目度や適応感に影響を及ぼすことが明らかになっている (e.g., 水野他, 2015)。これらの研究では、リッカート法により単一項目で人気度や中心度を測定しており、こうして測定されるものは当該生徒の地位を反映しうるのであるが、人気度に対する単一の自己評定を個人の学級内地位の指標とするのには無理がある。また、水野他 (2015) では、スクールカーストを扱っており、これは学級内のグループ間の関係性を扱っているため、グループに所属していない生徒は対象外となっている。そこで、学級内のすべての生徒に適用できる手法の開発が必要と考えた。森口 (2007) や鈴木 (2012) らの知見を踏まえて、学級内における自身の立場 (地位) を表す3つのシナリオを提示し、その中で最も自分の立場を表しているものを1つ選択するという SICS-P (Selected In-Class Status Perception) 法を開発し、その妥当性と信頼性を検討することを目的とした (研究1)。

(2) 次に、いじめ傍観行動において多元的無知を生み出す個人レベルのメカニズムについて検討した。傍観者の心理としては、いじめを目撃したとき、自分はいじめを抑止すべきだと思っ  
ていても、周囲の生徒がいじめを傍観しているという事実の観察から、周囲の生徒は傍観すべきだという態度を持っていると推測する傾向 (基本的帰属錯誤: Fundamental attribution error; Ross, 1977) を考えることができる。周囲の生徒が持っている態度の推測は、傍観している生徒が多いほど、いじめが起こっても見て見ぬ振りをするべきだという集団規範として受けとめられ、周囲に同調し傍観行動をとる。傍観すべきだという認識を誰もが持つことで、いじめが起こっても誰も抑止行動に向かわないという多元的無知の状態に陥ると考えられる。Sandstrom et al. (2013) は、目撃したいじめエピソードに対する規範の誤推測と行動反応との関連を探究した。その結果、多元的無知理論と一致するように、子どもたちは自分の個人的態度をクラスメートの態度よりも向社会的であると認識していた。さらに、集団規範の誤推測は、いじめに対する子どもの行動反応の報告と関連していた。つまり、仲間によるいじめの承認を過大評価した子どもは、被害者をかばうレベルが低く、いじめに加わるレベルが高いことが報告された。この測定に関して、宮島 (2017) は、具体例を示して課題を指摘し、改善点を提案している。具体的には、この測定では、あるトピックにおける個人態度として“6.とても肯定的”、他者態度推測としては“4.どちらかという肯定的”と回答した個人と、個人態度として“3.どちらかという否定的”、他者態度推測として“1.非常に否定的”と回答した個人を区別することができない、すなわち、両者の得点はどちらも-2となってしまう。ここで、先の Katz & Allport (1931) の定義を踏まえれば、多元的無知は“自他得点の相対的なズレ”よりもむしろ“自他得点の絶対的なばらつき”に基づいて扱われるべきである (宮島, 2017) とした。そして、この議論に基づき、宮島・山口 (2018) は、男性の育児休業における多元的無知の測定において、男性の育児休業に対する個人態度得点と他者

態度推測得点に基づき、回答者を4群に分類した。自身は育児休業を肯定しているが、(周囲の)他者は否定していると推測する群(多元的無知群)は、育児休業に賛成という少数派である自身の立場を隠すために、賛成を表明する人にサンクション(否認や懲罰など)を与えるという偽りの実効化(false enforcement)を行うと仮定し、その結果、多元的無知群が他者評価懸念を介して逸脱者に対する非難を高めること(偽りの実効化)を明らかにした。この知見をいじめの傍観行動に適用する場合、逸脱行動にあたるのは、いじめを抑止したり、いじめを告発したりする行動ということになる。しかし、いじめの場合、抑止や告発をする生徒に対する非難は、加害者側に加担することになり、学級内で問題となったときのリスクが大きいと考えられる。その意味では、逸脱行動への非難よりは、逸脱しないこと、つまり傍観行動への同調といった行動を採ることが予想される。そこで、いじめ傍観行動においても、宮島・山口(2018)と同様に、評価懸念が媒介し、周囲の傍観行動への同調を促進するかどうかを明らかにすることを旨とした。加えて、学級集団構造による違いがみられるかどうかを確認するため、SICS-P法を用いて学級内地位認知を測定し、学級ごとにおける地位の割合を求め、その結果から学級集団構造を求めて、集団構造間の違いを検討した(研究2)。

(3) 研究2で生じた課題について再検討を行った上で、学級内における他の生徒への信頼感が多元的無知群を生み出すのかどうかについて検討を行った。パネル調査を実施し、1学期における他の生徒への信頼感が2学期以降の自身の傍観態度及び周囲の他者の傍観態度の推測にどのような影響をもつのかを検討した(研究3)。

### 3. 研究の方法

本研究では、いずれも公立中学校の1年生から3年生を対象とした。

(1) SICS-P法の妥当性については、3つのシナリオそれぞれの当てはまりを評価してもらった上で、最も自分に当てはまるものを1つ選択してもらう方法をとった。選択したシナリオの当てはまりが選択しなかったシナリオの当てはまりよりも有意に当てはまると評価したことをもって妥当性の1つの証拠とした。加えて、シナリオに含まれている自身の立場に関連するコミュニケーション能力(自己主張性、共感性、同調性)や、一般的信頼感との関係を検討することで、SICS-P法の妥当性の一部を評価した。信頼性については、サンプルをランダムに2群に分けて、両サンプルで妥当性の検討の結果が同一であることを確認するという手法を用いた。

(2) SICS-P法に選択を求めた後、学級内でのいじめシナリオを読んでもらい、いじめ傍観(抑止)に関する自身の態度、いじめ傍観(抑止)に関する周囲の生徒の態度推測、周囲の傍観(抑止)への同調を測定した。

(3) 研究2とほぼ同様であるが、一部、質問項目の表現を見直した。また、分析の幅を広げることを期して、自尊心を測定する項目を追加した。パネル調査を実施し、1回目は夏休み前の7月、2回目は11月から12月に実施した。

いじめに関する調査であるので、一連の倫理手続き(倫理審査委員会における承認、保護者、生徒への諾否の確認)を経て実施した。

### 4. 研究成果

(1) SICS-P法の妥当性、信頼性の検討 Table1にあるように、上位群シナリオ、中位群シナリオ、下位群シナリオは適切に弁別できていた。妥当性の証拠の1つとして採用したコミュニケーション能力や信頼感は統計的な差はあった(Table2)が、効果量は必ずしも高い値ではなかった( $\eta^2=.02-.04$ )。また、学級単位で測定したので、マルチレベル相関分析を実施したが、集団レベル効果は見られなかった。個人のコミュニケーション能力を測定していたことを考えると個人レベルの効果に限定されると解釈した。

(2) 多元的無知が起こる個人内メカニズムの検討 いじめ傍観(抑止)態度の平均、周囲の他者のいじめ傍観(抑止)態度推測の基礎統計量を算出した上で、相関分析を行った(Table3)。いじめ傍観(抑止)に関する自身の態度と、周囲の生徒の態度推測の差を求めたところ、傍観態度、抑止態度ともに0から有意に離れていた。いずれの測定においても、周囲の他者の方が傍観すべき(抑止すべきでない)方向に推測していた。次に、自身は傍観しない(尺度値1,2)が周囲の生徒は傍観すべき(尺度値4,5)の生徒(pluralistic ignorance:以下PI群)を抽出し、自他共に傍観しない生徒(Positive:以下P群)と

Table 1 各群及び性別ごとのシナリオ評価の平均(SD)

	上位群 (n=556)		中位群 (n=746)		下位群 (n=608)	
	男子 (n=292)	女子 (n=264)	男子 (n=332)	女子 (n=414)	男子 (n=292)	女子 (n=316)
上位群シナリオ	4.01 (0.83)	4.05 (0.67)	2.65 (1.00)	2.68 (0.96)	2.41 (1.03)	2.38 (0.97)
中位群シナリオ	2.81 (1.08)	2.78 (1.04)	3.94 (0.78)	4.12 (0.64)	2.80 (1.02)	2.80 (1.02)
下位群シナリオ	2.51 (1.04)	2.47 (0.97)	2.64 (0.98)	2.74 (1.02)	4.02 (0.75)	4.13 (0.71)

Table 2 各群及び性別ごとのコミュニケーション能力等の平均(SD)

	上位群 (n=556)		中位群 (n=746)		下位群 (n=608)	
	男子 (n=292)	女子 (n=264)	男子 (n=332)	女子 (n=414)	男子 (n=292)	女子 (n=316)
影響力 ( $\alpha=.79$ )	3.49 (0.82)	3.19 (0.79)	3.13 (0.77)	2.98 (0.79)	2.98 (0.98)	2.84 (0.84)
自己主張性 ( $\alpha=.86$ )	3.86 (0.70)	3.62 (0.75)	3.59 (0.70)	3.40 (0.71)	3.53 (0.82)	3.28 (0.75)
共感性 ( $\alpha=.81$ )	4.11 (0.55)	4.23 (0.49)	3.93 (0.62)	4.15 (0.56)	3.85 (0.65)	4.04 (0.59)
同調性 ( $\alpha=.81$ )	3.68 (0.66)	3.54 (0.68)	3.44 (0.72)	3.46 (0.67)	3.25 (0.77)	3.24 (0.68)
信頼感 ( $\alpha=.86$ )	3.73 (0.85)	3.45 (0.80)	3.67 (0.79)	3.43 (0.80)	3.58 (0.91)	3.33 (0.83)

の比較を行った。2147 名中、傍観態度についてはPI 群が 253 名 (11.78%)、P 群が 901 名 (41.97%) であった。「どちらでもない(尺度値 3)」を含む回答をした生徒が 859 名 (40.01%) いた。同様に抑止態度については PI 群が 91 名 (4.24%)、P 群が 1261 名 (58.73%) であった。「どちらでもない」を含む回答をした生徒が 701 名 (32.65%) いた。媒介分析を行ったところ、傍観態度、抑止態度ともに PI 群の方が後者よりも周囲の傍観行動に対して同調することが示された。また、両者の関係において評価懸念の間接効果も有意であった。つまり、PI 群は評価懸念を介しても傍観(抑止)行動への同調が高まっていたことが明らかになった(Figure1)。加えて、SICSP 法を用いて、学級ごとに地位選択の比率を求め、クラス分析を行ったところ、3 つの学級集団構造に分類できた。クラス 1 は下位群のみが少なく、クラス 2 は中位群のみが少なく、クラス 3 は上位群が少なく中位群が多いという特徴をもっていると言える。多母集団同時分析を行ったところ、単回帰ではいずれのクラスも有意であった(クラス順に、 $\beta=.21, .29, .19, p<.01$ )。次に媒介モデルで分析したところ、上位群が少なく中位群が多い学級のみ、直接効果は有意傾向 ( $\beta=.19$  から  $\beta=.09$  ( $p<.05$ )) に減衰した(Figure2)。

Table 3 いじめ抑止(傍観)態度の平均(SD)及び変数間の相関

	M(SD)	b1	b2	b3
いじめの抑止態度	4.10(0.98)	—		
いじめ傍観態度	1.94(1.03)	-.41**	—	
周囲の他者のいじめ傍観推測	2.55(1.19)	-.26**	.44**	—
周囲の他者のいじめ抑止推測	3.94(1.04)	.45**	-.29**	-.35**

注) \*\*  $p<.01$

Figure1 多元的無知から傍観行動への同調意思(媒介分析)

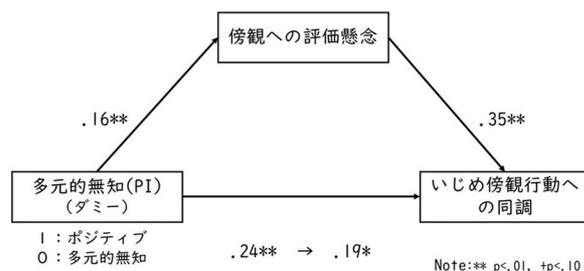
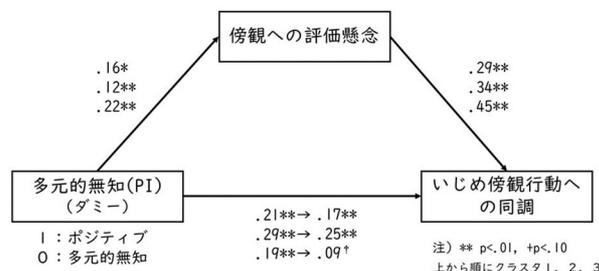


Figure2 多元的無知から傍観行動への同調意思(多母集団同時分析に媒介分析)



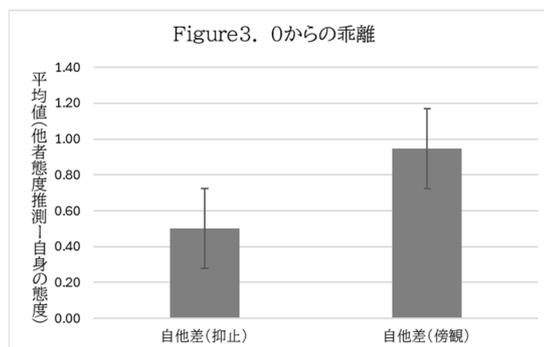
(3) 他の生徒への信頼感が自他の態度差に及ぼす影響 (2)において生徒の心理的負担を配慮して5件法を用いたが、分析から除外されるデータが多かったため、「どちらでもない」という判断を除き、いずれかの態度を選択するよう求める6件法を用い、質問項目の表現を工夫した上で再調査を実施した。

その結果、まず、Time1, Time2 それぞれにおいて、いじめ傍観(抑止)態度の平均、周囲の他者のいじめ傍観(抑止)態度推測の基礎統計量を算出した上で、相関分析を行った(Table4)。その上で、自身の態度と他の生徒の態度推測の差を求めたところ、傍観態度、抑止態度ともに0から有意に離れていた(Figure3)。いずれの測定においても、周囲の他者の方が傍観すべき(抑止すべきでない)方向に推測していた。次に、回答者をPI群・P群にそれぞれ割り当てた結果、傍観では1225名中27.1%( $n=413$ )と36.1%( $n=550$ )、抑止では1232名中15.5%( $n=237$ )と53.7%( $n=820$ )だった。「どちらでもない」を除いたことで、PI群の割合が増え、P群の割合は減っていた。改めて、媒介モデルを用いて分析したところ、傍観行動については、同様に、PI群の方が後者よりも周囲の傍観行動に対して同調すること、また、両者の関係において評価懸念の間接効果も有意であった。抑止行動については、直接効果のみが有意であった。

Table4 いじめ抑止(傍観)態度の平均(SD)

	M(SD)	b1	b2	b3
time 1				
b1:いじめの抑止態度	4.68(1.12)	—		
b2:いじめ傍観態度	2.48(1.26)	-.40**	—	
b3:周囲の他者のいじめ傍観推測	3.43(1.38)	-.22**	.38**	—
b4:周囲の他者のいじめ抑止推測	4.18(1.22)	.39**	-.15**	-.42**
time 2				
b1:いじめの抑止態度	4.68(1.22)	—		
b2:いじめ傍観態度	2.60(1.34)	-.40**	—	
b3:周囲の他者のいじめ傍観推測	3.52(1.39)	-.23**	.45**	—
b4:周囲の他者のいじめ抑止推測	4.17(1.27)	.42**	-.17**	-.42**

注) \*\*  $p<.01$



学級内の他の生徒への信頼感が個人の多元的無知傾向(自身の態度よりも周囲の生徒の態度推測がより傍観する方向に評価する傾向)を高めるのかを検討するために、周囲の生徒に対する信頼感を説明変数、群変化(いずれもPI群, PI群→P群)を目的変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、傍観、抑止いずれもTime1の信頼感が高いほど、Time2でP群

に移行する傾向が見られた(傍観  $\beta=.13, p=.06$ ; 抑止  $\beta=.22, p=.01$ )。また、逆の群変化(いずれも P 群, P 群→PI 群)についても同様の分析を行ったところ、傍観、抑止いずれも Time1 の信頼感が低いほど、Time2 で PI 群に移行する傾向が見られた(傍観  $\beta=-.12, p=.04$ ; 抑止  $\beta=-.16, p<.01$ )。

以上、3 つの研究から、学級内にいじめが起こった際に、いじめ傍観行動が強化されるメカニズムとして多元的無知が生じること、また、多元的無知が生じる傍観行動が学級内構造によって規定される可能性が示唆されたと言える。前者については、傍観(抑止)行動に対する自他の態度差(ズレ)から確認し、そのズレを学級単位で分析することで予測できる可能性が開かれたこと、後者については、特定の構造(上位群少・中位群多)においては多元的無知群が評価懸念を高め同調行動を促進することから、さらに詳細な分析を行うことで、いじめ傍観行動を予測可能ではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 有倉巳幸・稲垣勉・神山貴弥
2. 発表標題 いじめ傍観行動における多元的無知（4） - 周囲の生徒に対する信頼感が及ぼす影響 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第65回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 有倉巳幸・稲垣勉・神山貴弥
2. 発表標題 いじめ傍観行動における多元的無知（3） - 質問方法による反応分布の比較 -
3. 学会等名 日本心理学会第88回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 有倉巳幸・神山貴弥・稲垣勉
2. 発表標題 いじめ傍観行動における多元的無知（1） - 他者評価懸念による媒介効果の検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 稲垣勉・有倉巳幸・神山貴弥
2. 発表標題 いじめ傍観行動における多元的無知（2） - 学級集団構造による検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 有倉巳幸・神山貴弥・稲垣勉
2. 発表標題 学級内地位認知におけるフォールスコンセンサス効果
3. 学会等名 日本グループダイナミクス学会第69回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 有倉巳幸・神山貴弥・稲垣 勉
2. 発表標題 学級集団の階層性を測定する手法の開発（1） - SICSP 法の妥当性の検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲垣 勉・有倉巳幸・神山貴弥
2. 発表標題 学級集団の階層性を測定する手法の開発（2） - 学級内地位認知と一般的信頼感およびコミュニケーション能力との関連 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 有倉巳幸（大家まゆみ・稲垣勉（編著））	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 140
3. 書名 グローバル時代の教育相談：多様性の中で生きる子どもと教師	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	神山 貴弥  (Kohyama Takaya)  (00263658)	同志社大学・心理学部・教授    (34310)	
研究 分 担 者	稲垣 勉  (Inagaki Tsutomu)  (30584586)	京都外国語大学・外国語学部・准教授    (34302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関